

御 阿 礼 式

明  廻

証 空 時 轉

ミ ア シ シ キ カ イ テ ン シ ク ウ シ ヨ ウ メ イ
SELF-REFERENCE ENGINE OF HIGASHI'S ARCHIVES

Answer
Broken
Connotation
Desire
Exhibit
Fundament
Gene
Hesitate
Irony
Judecca
Key
Love
Metaphor
Nobody
Occasion
Probability
Question



Answer



私は今まさに語り始める。

これは、起こらなかった事件の物語だ。起こりえなかったし、起こってはいけなかった。ゆえに、起こらなかった。始まってすらおらず、ゆえに、終わってすらいない。

そんな出来事を、何と呼べばいいだろう？

私はそれに名づけをするために語る。語る行為がそのまま名づけになるし、この一連の文章そのものがそのの名前になると信じる。これから語ることは、実質的には私の妄想と区別することができない。私の記憶と、触感の残り香があるのみだ。幻想郷のどこを探してもその事件の痕跡も何も見つからないだろう。それが起こったことを知っているのは、私と、その異変の元凶だけだ。

いや、正確に言うなら、この異変に元凶などいなかった。中心を欠き、周りでただひたすらに事象が空転していただけ……私たちは元凶なき異変を存在させるために利用されていたようなものだ……さながら、マクガフィンに踊らされる人物たちと同じく。

元凶なきゆえに、博麗の巫女が動かない……動けない異変。スペルカードルールでの解決のできない異変。公理系に矛盾する命題が存在できないように、ルールに反する異変は異変とは呼べない。

しかし、そもそも、異変とは何か？スペルカード決闘を起こすスウィッチとしてのごっこ遊びという表層を除いた、〈異変〉という事象そのものの定義をひとことと言いつつならば……思うに、〈妖怪による小規模な革命〉、秩序のハック……公理系の改竄^{かいざん}である。人間原理的な世界へのカウンター、妖怪の自意識を世界の秩序と代替わりさせようというたくらみである。その本質だけは、スペルカードルール制定以前も、それ以

後も変わりほしくない。そういう意味で、このできごとはまさに異変だった。

私は偶然、能力ゆえに、このできご事を認識し、それに能動的に介入できる機会を持っていた。スペルカードの埒外の異変だったからこそ、埒外の者である私が関われたといえる。そして……私だけが関わる事ができた、私こそが関わるべきで、そのようになったのできごとなのだ。

もったいぶるのはやめにしよう。私は語る。

私は、稗田阿求。

九代目御阿礼子として生を享け、初代稗田阿礼よりの悲願を継ぎ、この郷を見、記録する者である。いやしくも〈幻想の記憶〉なる二つ名を頂戴する者にして、饒舌なる傍観者。ひぐらし散歩と縁起編纂で過ごし、紅茶と玄樂を好む。

幻想郷への愛を思うとおりに表現できるこの立場を、私はひどく幸運に思っている……かくなる小さな傍観

者が埒外の舞台に乗せられ、いかに道化を演じたか、どうかご覧頂きたい。起こらなかつた物語を語る、この行為それ自体が道化であるのだから、笑われなければ嘘というものだ。おそらく、退屈はさせないことだろう。

ここに、私は私をリファレンスする。



先んじて、ひとつ。この物語には、ひとつ、解明の術のない謎が残ってしまうことを申し上げておく。すべてが終わってしまった……もしくは、すべてが始まらなかった……今となっては、それを知る手段は残されていらない。すなわち、最初に、彼女は、なぜ、死ぬことになったの、どう？



どこまでも、どこまでもまっくらな水底に、ちよつ

とした拍子に、離れ小島のように浮かんでいる〈自分〉を発見する。私にとって、目覚めはそのように訪れる。日の出をとくに過ぎ、障子越しの陽が部屋を乳色の光で満たしていた。上半身を起こすと障子の外に影がさし、ひとりの女中が、おはようございます、と言った。彼女は初^{はつ}という。私を起こしに来るのは初の役割だった。私はいつもと変わらず、習慣通りの時刻に目覚めたことを知る。

初^{はつ}のつきそいで身支度と着替えを済ませる頃に朝餉^{あさけ}の膳^{ぜん}が運ばれてきた。白米に山女^{やまめ}、澄まし汁。香の物は菜の花だった。

「もう、春ですね」

膳を前にして、そんな言葉が転がり出た。初は髪上

げ前の少女らしく、そばかすの頬を緩めて、はにかむようにほほ笑んだ。といつても、今の私とて彼女と変わらぬ小娘なのだけけれど。背格好で言えば、私の方がよっぽどおほこだ。

「あっ」

声が上がった。床の間の花瓶を持ち上げようとして、初は手を滑らせた。白磁の花瓶が割れ、畳に水が染みた。椿の花びらが散った。

「し、失礼しましたっ」

雑巾を取りに行く彼女の背中に、気にしなくていいですよ、と声をかけた。特に高級なものでもなかったし本当に問題はなかった。彼女が後片付けをする横で、私は膳に箸をつけた。

「本当に、申し訳ございません」

「気にしなくていいですってば。……ごちそうさま。おいしかったですと厨^{くわ}の方に言っておいて下さい」

初は申し訳なさそうに笑って、膳を片付けた。縁側

を厨へ歩いてゆく後姿を好ましい気持ちで見送る。庭は冬枯れの風景の中に松の緑が日光に映え、梅の枝の芽がほころびはじめているようで、季節の訪れを予感させた。私は庭に向かいながら大きく息を吸って、吐く。ちょっとしたアクシデントはあったものの、普段とそう変わりはない、いつもの、さわやかな朝がそこにある。部屋の日めくりの前に立って、**十九**と書かれた紙を破り、今日の日付が新たに変わったのを確かめる。**二十**の文字がびかびかして見えた。

「今日の予定は」とひとりごちたところに、一匹の野良が足元にすり寄ってくる。おなじみの三毛。邸やしやに好きに居させている野良たちの中でも、ひとさわ私のそばに来ることの多い猫だ。野良はしつぽをちよつと揺らすと、私の顔を見上げる。これ幸い。「今日の予定はですね……」と、私は三毛に話しかける。能力ゆえに、私は手帳の類を必要としない。しかしそうやって何でもかんでも黙々と記憶通りにこなすということに

も多少の不気味さがつきまとうし、落ち着かないので、その日の予定は声に出して確認することになっている。一見無駄な行為のように見えるだろうけれど、いわば、私にとってそれは一種の儀式だ。そして、野良がいてくれれば、それは寂しい独り言ではなくなってくれる。三毛は耳をぴん、と震わせて、私の顔をじつと見る。「今日はまず、紅魔館に向かいます。レミア・スカーレットが私に話したいことがあるとか」

三毛は瞬きした。

「そうして、お昼からは命蓮寺ですね。彼女らのことはまだ知らないことが多いですから、取材して縁起におこせるようにせねば」

つぶし。

三毛はくしゃみをし、首をぶるぶると振った。そうしてくすぐったそうに顔を洗い始める。その仕草があんまり平和で、私はつい笑ってしまった。三毛はあくびをすると厨のほうへ行ってしまった。

外套を羽織つて支度をすると、私は部屋に戻ってきた初にひとこと言づけた。初は私の予定をすべて心でているので、うなずいて私を見送った。玄関の戸を閉めるぴしゃりという音が私の背中を心地よく押しした。名残雪の冷たさの後引く風に、かすかな春の予感を帯びた陽だまりのかおる、良い日和だった。

里からの出がけに、数人の男性の慌ただしく駆けてくるのとすれ違った。里の中でも自警等の当番になっている若い衆たちだった。気にはなつたけど、吸血鬼との約束の時刻が近づいていた。

■

門番は私の顔を見るなり、ありあまるほどの歓迎の意を全身であらわし、すぐ取り次ぎます、と弾んだ声で言うやいなや館の中にとつて返した。ほどなくしてメイド長があらわれ、私は客間に通される。館の内部

……窓の少ない廊下は夜のようにランプが一定間隔で灯り、先刻感じたような春の予感はずいぶん奥に進むにつれ、一歩ごとに遠のいた。

紅魔館にはすでに何度も訪れているのに、この廊下の人間を威圧するような空気はどうにも慣れなかった。十六夜昨夜の後ろにびったりくっついて歩くと、彼女は私に一瞥をよこした。そうして次の瞬間にはその手に手提げランプがあった。

「気が利かずに申し訳ありません。足元にご注意を」
彼女が薄く微笑むなり、空気の密度が和らいだようだった。私は、ほう、とひとつ息を吐いた。「ありがとうございます、大丈夫です」

さすがは〈瀟洒な従者〉、と私は内心で称賛した。そしてそれだけではなくて、この館の中にあつて、以前会った時より人間味が増したというか、端的にいえば〈優しく〉なっているように見えた。

「お嬢様がお呼び立てして……お忙しいところありが